太宰治の「惜別」論

-魯迅像のずれと雜誌『日華學報』をめぐって-

李 顯 周*

目　次

1. はじめに
2. 魯迅像とのずれと魯迅伝記をめぐって
3. 中國人留學生像と雜誌『日華學報』をめぐって
4. むすびに

1. はじめに

太宰治の「惜別」は、内閣情報局と日本文學報國會とによる大東亞五大宣言の文學作品化の企畫にえらばれて書き下ろした長編である。この作品は1945年2月に完成されているが、出版は戰後の9月朝日新聞社より刊行されている。その内容は中國の大文豪魯迅の日本の仙台医專時代を描いた伝記小說であるが、太宰が戰時下の当局の要請に自ら積極的に応じて執筆した唯一の作品であると言える。この「惜別」に對して、「一篇の戰爭小說も、戰爭礼讚の小說も書かず[1]」と、戰時期の太宰文學を評価してきた奥野健男も、「いわば太宰治にとって、当局の要請に応えて書いた唯一の國策小說[2]」であると、嚴しい評価を下しているなど、從來の研究の中には否定的な評価が多くみられる。その否定的な評価の中には、實際の魯迅像とのずれを指摘する言說[3]と、「惜別」が大東亞五大宣言の中でも<獨立親和>を主題として描かれたという時代背景との關連性を追求した言說に占められている。「惜別」に對する從來の研究が、以上の

* 인하대학교 인문과학연구소 연구원, 일본근현대문학

1) 奥野健男『太宰治』、文芸春秋、1973年10月、110頁

2) 奥野健男『惜別』新潮文庫, 1973年3月

3) 魯迅研究者である竹内好は、「魯迅像を無視した、作家の主觀だけででつ上げた魯迅像」(「花鳥風月」『新日本文學』1956年10月)と批判し、尾崎秀樹は「彼の魯迅に關する知識は竹内の『魯迅』の前にあまりにも貧弱でありしぎた」(「大東亞宣言と二つの作品—『女の一生』と『惜別』—」『文學』1961年8月)と、竹内の『魯迅』と比較し、太宰治の魯迅に對する知識の貧弱さを指摘している。また千葉正昭は、「魯迅という人物像を使って太宰の自畫像を綴ったにすぎない」(「太宰治と魯迅—『惜別』を中心として—」『國文學　解釋と鑑賞』)など、實際の魯迅像とのずれを指摘しながら、

二つの言説を中心に行われていたため、「惜別」が太宰文學の中に占められる位置は、「失敗作」あるいは「國策小說」という汚名が与えられてきたといえる。

本論文では、「惜別」に關する否定的な評価の中でも、魯迅像のずれとの關係を中心に論じてみたい。その方法論としては、「惜別」の中に實際に使われている魯迅の伝記や中國に關する雜誌メディアの分析を通して、實在の魯迅像や中國人像とのずれの問題を考察しながら、これまでの「惜別」に對する否定的な評価との關連性を追求することを目的としたい。

2. 魯迅像とのずれと魯迅伝記をめぐって

小說「惜別」に對する否定的な評価の中には、實在の魯迅像とのずれと、太宰の中國に對する認識の不足を指摘している言說が多くみられる。まず竹内好は「惜別」に對して、「魯迅の思想とはまるきり反對」[4]や「おそらく魯迅の文章を無視して、作者の主觀だけででつち上げた魯迅像」[5]など、實在の魯迅像とは異なる「作者の自畫像」に過ぎないと嚴しく批判している。また尾崎秀樹も竹内の批判をふまえた上、「彼の魯迅に關する知識は竹内の『魯迅』の前にあまりにも貧弱でありすぎた」[6]と、太宰の魯迅に對する認識の不足を指摘している。このような「惜別」の中に描かれている魯迅像と實在の魯迅像とのギャップによる批判は、これまで竹内好論を據点に論じられてきたといってよかろう。この從來の言說の方法論は、實在の魯迅像と作家太宰によって創り上げられた虛構の魯迅像が比較されることが多く、魯迅研究者であった竹内好の言說は、もっとも說得力があったと思われる。

しかし「惜別」の中には、太宰による虛構の魯迅像だけではなく、魯迅の伝記や当時の中國人留學生に關する雜誌など、實在の魯迅と中國に對する資料が多く使われていることに氣づく。とりわけ魯迅の幼年時代や「ノート事件」そして「幻灯事件」など魯迅の生涯で大きな轉機をもたらした事實に關する敍述の中には、魯迅の伝記を書き寫すなど、魯迅關連の資料がことこまかに引用されている。また「惜別」に描かれている中國人留學生像は、当時の中國人留學生の動向が具体的に書かれた雜誌メディアを參考にするなど、實際の魯迅に接近しようとする太宰の意図が感じられる。すなわち小說「惜別」の中には、作家太宰によって創り出された虛構の魯迅像とともに、實際の魯迅に關する資料による魯迅像が同時に描かれているのである。

それでは太宰が「惜別」を執筆する際、參考にした資料は、どういうものであったのだろうか。そしてその魯迅關連の資料は、どのように「惜別」の中に利用されていたのかについてふれてみることにしよう。實際に使われていた魯迅關連の資料の分析を通して、「惜別」における

---

4)「藤野先生」『近代文學』1947年2、3月合併号
5)「花鳥風月」『新日本文學』1956年10号
6)「大東亞共同宣言と二つの作品―「女の一生」と「惜別」―」『文芸日本』1961年6月～9月

「魯迅像とのずれ」の問題と中國人留學生像を再考してみることにしたい。

太宰が「惜別」を構想する際、魯迅に關する主な資料の提供者は小田嶽夫であった。それは小田嶽夫の「「惜別」の頃」」[7]という回想文の中にくわしく書かれている。その回想文の中には、太宰はすでに1941年に出版された小田の『魯迅伝』(1941年3月、筑摩書房)を讀んでいたことと、中國關係の雜誌『日華學報』にも非常に關心を示していたことが確認できる。[8] そして實際「惜別」を讀み通してみると、小田の『魯迅伝』が多く引用されていることがわかる。それは魯迅の幼年時代や仙台時医專時代の「ノート事件」そして「幻灯事件」などの背景に關する描寫の中から確認することができる。それに對して幾つかの文章を比較してみることにしたい。まず幼年時代の魯迅が父親を看病する時の描寫をあげてみることにしよう。

> 父は三年間痛みつづけた。その間彼は殆んど毎日のやうに質屋と藥屋の間を往來した。藥屋の店台は彼の身の丈位ゐの高さがあり、質屋の店台はその倍位ゐもある高さであつた。彼はその見上げるやうな高い台の上に質素の衣服や首飾りなどを差し上げ、それを低当に受け取つた金ですぐさま藥屋へ走つてその身の丈程高い店台で藥を購つた。(小田嶽夫『魯迅伝』1941年3月、筑摩書房、45頁)

> それから三年間、自分は毎日のやうに、質屋と藥屋に通はなければならなかつた。父の病氣がいつこうに快くならなかつたのだ。藥屋の店台は自分と同じくらゐの高さで、質屋の店台はさらにその倍くらゐの高さであつた。自分は質屋の高い台の上に、着物や首飾を差し上げ、なんだこんなガラクタ、と質屋の番頭に嘲弄されながら、わづかの錢を受けとり、すぐその足で藥屋に走るのだ。(『太宰治全集』1998年、筑摩書房、194頁)

この二つの文章を比較してみると、小田の『魯迅伝』の文章が書き直されることもなく、ほぼ書き寫される狀態で書かれていることがみてとれる。このように「惜別」の中には、小田の『魯迅伝』の文書がそのまま書き寫されている描寫が多くみられる。次の引用は少年時代の村芝居に關する文章である。

> 豆麥の畑の間を通る河を五支里程蓬船に乘つてでかけるのだが、村芝居そのものよりも往復の途中の樂しさが忘れられないらしく、後年特に「村芝居」といふ題の短編によつて彼はその頃の思い出を生かしてゐる。その作品に出てくる趙莊行は夜になつてから大人を交へずに大勢の子

---

7) 「太宰治全集附錄第五号」『太宰治全集』第11卷、八木書店、1949年1月

8) 小田嶽夫は「「惜別」準備の頃」の中で、「昭和16年に私が「魯迅伝」を出したときのことだが、友人その他へと寄贈をすませた23日後龜井君を訪ねたら、「さっき太宰君が來たが、もう『魯迅伝』を全部讀んだそうだ」と龜井君が語ったところから見て(中略)葉書のなかにある「雜誌」というのは、或る中國關係の雜誌で、それに實藤惠秀氏が中國學生の日本留學史というようなものを連載していたので、それが送られて來る度に太宰君に送っていたのであった」と回想している。

供たちだけでの見物で、船も中で比較的大きい子供たちが漕ぐのである。月の光りが水蒸汽の中にもうろうとし、薄黑い連山は踊り上つた獸の背のやうに見え、遠くに漁火が光つてゐるかと思ふと又どこからともなく横笛の音が宛轉悠揚と聞えて來たりする。(小田嶽夫『魯迅伝』1941年3月、筑摩書房、38頁)

豆麥の畑の間を通る河を蓬船に乘つて出掛けるのだが、大人を交へず大勢の子供たちだけの見物で、船もその中で比較的大きい子供が順番に漕ぐのである。月光が河の靄に溶けて朦朧として、青黑い連山は踊り上つた獸の背のように見え、遠くに漁火がきらめいてゐるかと思ふとまたどこからともなく横笛の音が哀れに聞こえる。(『太宰治全集』1998年、筑摩書房、238頁)

この二つの文章の中には、場所の雰囲氣をあらわす單語や、芝居の模様の描寫がまったく一致していることに氣づく。その上、「惜別」の中では、周さんの回想の形式で語られているため、小田の『魯迅伝』より寫實感がましているように感じられる。この小田の『魯迅伝』を書き寫したかのような文章は、例の「ノート事件」の敍述からもみることができる。

この教授がある日彼を自分の研究室へ呼んでノートを見せてくれと言つた。で、彼がノートを持つて行つたら教授はそれを預かり、二三日後に、今後は一週間ごとに持つて來て見せなさい、と言つて彼にノートを返した。彼がそれを開けて見たらそれは初めから終りまで朱筆に埋められてゐた。誤りを直し、書き落してゐるところを書き足してゐるばかりでなく、文法の誤りまで逐一訂正されてあつた。そしてその後、このノート訂正はずつとつゞけられた。(小田嶽夫『魯迅伝』筑摩書房、1941年3月、58頁)

周さんがノオトを持つて行くと、先生はそれを預つて、二、三日経つてから、かへして下さつて、さうして、「これから、一週間毎にノオトを持つておいで。」とおつしやる。周さんは先生から返されたノオトをあけてみて、びつくりした。ノオトは始めから終りまで全部、朱筆が加へられ、たくさんの書き落しの箇所が奇麗に埋められてゐるばかりか、文法の誤りまで、いちいちこまかく訂正せられてゐるではないか。「それから、もう、毎週、それが續いてゐるのです」(『太宰治全集』筑摩書房、1998年、240頁)

藤野先生の魯迅に對する思いやりで、解剖學のノートを修正してあげる場面であるが、「惜別」では會話の形式になっていること以外には、ほぼ小田の『魯迅伝』を丹念に書き寫していることが確認できる。

このように「惜別」の中には、小田嶽夫の『魯迅伝』が多く引用されていることが明らかになった。その上、小田の文章をそのまま書き寫していることが、以上の三つの文章の比較を通して確認できた。すなわち「惜別」に描かれている實際の魯迅像の形成には、小田の『魯迅伝』が大き

く作用しているといえよう。そのためであろうか、小田嶽夫の「惜別」に對する同時代評価は、これまでの不定的な評価とは異なる觀点から論じられている。9)

> 魯迅の作品中に出て來ることや、当時の中國の狀況などが、少しも浮き上がらずに、作品中にしっくりと溶け込んで出ているのである。ああいう國際的とも言える、或る意味でスケールの大きい、一見太宰君らしくない題材を扱いながら、太宰色の濃い、淀みなく讀ませるような作品にしている(魯迅の話す言葉にもう少し魯迅一流のするどさや辛辣味が欲しかった)ところに、太宰君の卓拔な作家手腕がうかがわれるが、併しそのかげには又以上のような非常な努力―周到な用意もあったのであった。(小田嶽夫「『惜別』準備の頃、1956年4月20日發行の『太宰治全集』第7卷」

小田は「惜別」に描かれている「魯迅の話し言葉」に多少不滿を現しているものの、他は作品中に魯迅像がよく融合しており、そこには太宰らしいものが讀み取れるなど「太宰君の卓拔な作家手腕」が充分活かされていると激賛している。また太宰の「惜別」のための資料收集に熱心であったことに對しても高く評価している。この小田嶽夫の「惜別」に對する評価は、前掲した竹内好の「魯迅像のずれ」による嚴しい批判とは對照的に、「太宰の色」が充分樂しめる作品であることが强調されている。

それでは竹内は、小田の『魯迅伝』をどう評価していたのか。竹内好は小田の『魯迅伝』について、「よくできた、というのは、魯迅の文章を丹念に整理して、再構成してあるからである。そして私は、いささかアマノジャクめくが、その点に問題を感じるのである」と、ひややかな評価をくだしている。竹内は「惜別」に描かれている虛構の魯迅像に對しても、小田の『魯迅伝』を引用して書いた實際の魯迅像に對しても「魯迅像のずれ」を感じたのではなかろうか。ここで注目したいのは、太宰が「惜別」を書き始めた頃、竹内も昭和十九年刊行されたばかりの『魯迅伝』を太宰宛に送っていた事實である。おそらく太宰が「大東亞五大宣言」の作品化に選ばれ、魯迅を主題として作品を書いていることを承知の上でのことであっただろう。この事實に關して、太宰は「惜別」の初版本の「あとがき」の中で次のようにふれている。

> 小田氏にも、「魯迅伝」といふ春の花のやうに甘美な名著があるけれども、いよいよ私がこの小說を書きはじめた、その直前に、竹内好氏から同氏の最近出版されたばかりの、これまた霜の如くきびしい名著「魯迅」が、全く思ひがけなく私に惠送せられて來たのである。

太宰は突然の竹内好の寄贈を受けるのだが、小田の『魯迅伝』とはかなり異なっていることに氣づく。しかし「惜別」の中に描かれている實際の魯迅は、前述のとおり小田の『魯迅伝』を忠實

9) 注8參照。

に引用されたものが多かった。竹内は戰爭中の太宰の作品が、比較的にすきだったが、この「惜別」を讀んで、「ガッカリした」と語っている。その一つの理由として、自分の魯迅伝記とはかけはなれた小田の『魯迅伝』を忠實に引用していることが考えられるのではなかろうか。そして竹内の「魯迅像のずれ」という否定的な評価の中には、太宰によって創り出された虚構の魯迅像だけではなく、小田の『魯迅伝』からうまれた偏った實際の魯迅像の存在も念頭に置かねばならない。

3. 中國人留學生像と雜誌『日華學報』をめぐって

太宰が「惜別」を執筆する際、興味を示した資料の中で、小田嶽夫が提供した中國關連の雜誌に注目してみたい。というのは、「惜別」に描かれている中國人留學生表象は、この中國關連の雜誌を參考した可能性が高いと考えられるからである。

「惜別」には日本を西歐に劣らない先進國であることが强調したり、日本の良さについて書かれているところが目立つ。

> 日本だ、これが日本だ、自分もいよいよこの先進國で、あたらしい學問に專念できるのだ、と思つた時には、自分のそれまで一度も味つた事の無かつた言ふに言はれれぬほのぼのした悅びが胸に込み上げて來て、獨逸行きの志望も何も綺麗に霜散してしまつたほどで、本当に、あのやうな不思議な解放のよろこびは、これから自分の生涯において、支那の再建が成就した日ならともかく、その他にはおそらく再びけいけんすることが出來ないのではなからうかと思はれる。(『太宰治全集』筑摩書房、1998年、203頁)

> 日本は世界のどこにも無い獨自の清潔感を持つてゐることを直感した。田畑は、おそらく無意識にであらう、美しくきちんと整理されてゐる。それに續く工場街は、黑煙濛々と空を覆ひながら、その一つ一つの工場の間を爽やかな風が吹き拔けてゐる感じで、その新鮮な秩序と緊張の氣配は、支那において全く見かけられなかつたもので、自分のその後、東京の街を朝早く散步する度每に、どの家でも女の人が眞新しい手拭を頭にかぶつて、襷をかけて、いそがしげに障子にはたきをかける姿を見て、その朝日を浴びて可憐に緊張してゐる姿こそ、日本の象徵のやうに思はれて神の國の本質をちらと理解できたやうな氣さへしたものだが、(後略) (『太宰治全集』筑摩書房、1998年、203頁)

このように日本に對する魯迅の感想は、日本を獨逸ような先進國として認識し、支那とはまったく異なることを强調している。特に女性の働く姿から＜日本の象徵＞だと思い、＜神の國の本質＞を理解しようとするところは、「惜別」が大東亞五大宣言の文學作品化の企畫で選

ばれて書いたことを蘇らせる。しかし日本に對する描寫とは異なって、中國と中國人留學生については批判的な文章が多くみられる。

> (中略) 自分もやはり清國留學生、いはば支那から特に選ばれて派遣されて來た秀才が多すぎて、東京中いたるところに徘徊してゐるので、拍子抜けのする氣分にならざるを得ないのである。春になれば、上野公園の櫻が万朶の花をひらいて、確かにくれなゐの輕雲の如く見えたが、しかし花の下には、きまつてその選ばれた秀才たちの一団が寢そべつて談笑してゐるので、自分はその櫻花爛漫を落ちついた氣持で觀賞することが出來なくなつてしまふのである。その秀才たちは、弁髪を頭のてつぺんにぐるぐる卷にして、その上に制帽が異様にもりあがつて富士山の如き形になつてゐて、甚だ滑稽と申し上げるより他は無かつた。(『太宰治全集』筑摩書房、1998年、204~205頁)

この引用文は当時の清國留學生が東京に多く滯在し、學問よりは花火をしているところを批判している。このような日常生活に對する批判だけではなく、清國の革命の問題も取り上げている。

> 支那の革命運動の現狀に就いて、自分はまだはつきりした事はわからぬが、三合會、哥老會、興中會などの革命党の秘密結社は、孫文を盟主として、もうとつくに大同団結を遂げてゐ様子で、(中略) このごろでは東京が支那革命運動の本據になつてゐるやうな工合らしいので、留日學生の興奮もすさまじく、寄るとさはると打清興漢の氣勢を擧げ、學業も何も投げ棄ててしまつてゐる有様である。(『太宰治全集』筑摩書房、1998年、206頁)

ここで注目したいのは、当時の中國や中國人留學生に對する批判的な描寫である。それを中國人留學生である魯迅に言わせているものの、日本人を中心とする言說が多いということである。すなわち「惜別」が＜中國に對する認識の不足＞という否定的な評価が多いのは、このような中國や中國人留學生に對する客觀性の不足から起因するのではなかろうか。それで当時太宰が直接目にしていた資料を通してその疑問に接近してみたいと思う。

まず、太宰が「惜別」を執筆する際、興味を示してした『日華學報』(日華學報發行) を中心に追求してみることにしたい。それは雜誌『日華學報』に掲載されているある記事が「惜別」に描かれている中國人留學生像に大きく影響していると思われるからである。

『日華學報』という雜誌は、太宰の知人である小田嶽夫が太宰に送っていた雜誌である。その中でも太宰が注目していたと思われるのは、實藤惠秀が『日華學報』に1936年12月号から1939年3月号まで連載していた「中國人日本留學史稿」という記事である。

> 葉書のなかにある「雜誌」というのは、或る中國關連系の雜誌で、それに實藤惠秀氏が中國學生

の日本中學史というようなものを連載していたので、それが送られて來る度に太宰君に送っていたのであった。
太宰君がその頃大魯迅全集やその雜誌ばかりでなく、中國關連係のいろいろの書物を非常に熱心に讀んだらしいことが「惜別」を見るとよくわかる。(小田嶽夫「『惜別』準備の頃」1956年4月20日發行の『太宰治全集』第7巻)

その中には中國人の日本における留學史が詳細に記されている。太宰がこの記事に興味を示していたのは、魯迅が日本に留學していた明治30年代の中國人留學生の情報が当時の雜誌メディアの記事や言說を中心に、具体的に書かれていたからであろう。それは小說「惜別」の中に描かれている中國人留學生像をうかがってみると、實藤惠秀の「中國人日本留學史稿」という連載記事と深く關わっていることがわかる。

それでは、雜誌『日華學報』とそこに掲載された實藤惠秀の「中國人日本留學史稿」という記事が、「惜別」の中國人留學生像にどのように影響を与えていたのかを檢討してみたい。
雜誌『日華學報』は1928年をはじめ、毎年4回、日華學會で發行された。当時の中國人中學生の狀況を詳しく伝えながら、東亞學校の宣伝と日中の親善促進を目標にしていた。『日華學報』第66号の目次をあげてみると、

日華學報　第六十六号　目次

口繪　日本亡命当時の唐・染　同盟會の人々　留學生の發行せる雜誌
口繪　東洋婦人會の女子留學生招待會
中國人日本留學史稿(八) …… 早校教授　實藤惠秀　(一)
東亞學校 …… (四一)
各班別在籍表　省別表　學生名簿
京津維持會施行の日語教員檢試發表 …… (四四)
東洋婦人會「共樂會」のこと …… (四五)
共樂會について …… 服部繁子　(四六)
日本へ來てからの色々 …… 東亞學校二期一班巖希傑　(四七)

東亞學校とは中國留學生のために東京に立てられた學校で、中國人の留學生に日本語を教えるだけではなく、高等科(日本高等學校課程)、英數班(英語と數學班)、物理化學班などを設置して、日本の學生と同レベルの教育を行っていた。中國人留學生數は毎年3、4百人から6、7百人の間であったが、滿州事変後は一時減少していたが、その後は增加しつづけて、1925年には2千人を越えることもあった。東亞學校も午前、午後、夜間と3部に分けて授業を行う狀態であった。雜誌『日華學報』はこの東亞學校の學生を募集する廣告とともに、東亞學校の紹介と宿舍の寫眞も掲載して、東亞學校の宣伝の場を提供していたのである。

(1935年11月号)

東亞學校など日本が当時中國人留學生を積極的に受け入れ、日本の學生と同レベルの授業を行っていたことは、戰爭下の日本の教育政策の一つであったことが考えられる。そのはじまりは日清戰爭以後に遡る。日清戰爭で敗北をあじわった清國は日本の近代化を學ぶために中國人留學生日本に送りはじめたのである。

この『日華學報』に掲載されている實藤惠秀氏の「中國人日本留學史稿」と「惜別」に書かれている中國人留學生表象との關わりを引用文を通して比較することにしたい。その中でも中國が日本留學をすすめる理由について、張之洞が著述した『勸學篇』の中にある「遊學」篇を取り上げて說明しているところをあげてみよう。

> その頃、政府が費用を出して、年々すこしづつの清國留學生を日本に送りはじめてゐたのである。その 二、三年前に張之洞の著した有名な勸學篇などにも、大いに日本留學の必要が力說されてゐて、(中略) さうして結論は、「遊學の國の至りては、西洋は日本に如かず」といふ事になつてゐるが、しかし、その理由としては、
>
> 一、路近くして費をはぶき、多くの學生を派遣し得べし。
> 一、日本文は漢文に近くして、通曉し易し。
> 一、西學は甚だ繁、およそ西學の切要ならざるものは、日本人すでに刪節して之を酌改す。
> 一、日支の情勢、風俗相近く、順ひ易し。事なかばにして功倍する事、之にすぐるものなし。(『太宰治全集』201～202頁)

この「遊學」篇におさめられた4つの項目は、雑誌『日華學報』の第63号の中でもみられる。明治30年代に急激に増加する中國人留學生の動向について、同時代の資料などを提示しながら、詳しく書かれている。その記事を參考にあげてみると、

> 日本遊學に對する大宣言は勸學篇である。湖廣總督張之洞が、勸學篇を著したのは、光緒二十四年(一八九八)三月のことであつたが、この内外二十四篇に盛る思想は、光緒二十一年乃至二十二年の頃に胚胎したと見て誤ないものと思ふ。その「遊學」篇に於て極力日本遊學を奬め、また「廣譯」篇に於ては、日書を譯することの必要を力説してゐる。(中略)「遊學の國に至りては西洋は東洋(日本)に如かず、一、路近くして費を省き、多く遣すべし。一、華を去ること近くして考察し易し。一、東文(日文)は中文に近くして、通曉し易し。一、西學甚だ繁、凡そ西學の切要ならざるものは、東人已に刪節して之を酌改す。中、東、の情勢風俗相近く、彷行し易し。事半にして功倍すること、此に過ぐるものなし。」(遊學)(『日華學報』第63号、1937年)

となっている。雑誌『日華學報』の實藤惠秀の記事は、このような中國人の日本留學の背景だけではなく、当時の中國人留學生の狀況がことこまかに書かれており、「惜別」の中でもこれに關する記事の引用が見られる。その中でも中國人留學生の廢幣の記事が引用されていることに注目してみたい。まず東京で續出していた速成教育に關する描寫を比較してみたい。

> 自分が東京に來たこの明治三十五年前後から、清國留學生の數も急激に增加し、わづか二、三年のうちに、もう支那からの留學生が二千人以上も東京に集つて來て、これを迎へて、まづ日本語を教へ、また地理、歴史、數學などの大体の基本知識を与へる學校も東京に續々と出來て、中には怪しげな速成教育を施して、ひとまうけをたくらむ愕質の學校さへ出現した樣子で、(中略)れいの速成教育で石鹼製造法など學び、わづか一ヶ月の留學であやしげな卒業証書を得て、これからすぐ歸國して石鹼を製造し、大まうけをするのだ、と大威張りで吹聽して歩いてゐる風変りの學生さへあつたほどで、(後略)(「惜別」太宰治全集八卷、204~206頁)

> 明治三四年以來、留學生は日に增加して來たとはいへ、明治38年の初までは、まだ三四千人といふところであつた。(中略)当時は、Aの學校に於て一ヶ年で教へるといべば、Bの學校では当校は八ヶ月で教へる、C校は半ヶ月で、といふ風に競爭的傾向があつた、甚しきは數ヶ月、或は數日、××製造法などといふものを通譯附で説明し、その場で「卒業証書」を授けるといふ風ないはゞ大道商人的のことまでもあつた。留學生の方でも、一つでも多く卒業証書を握つて歸るほどよいといふ淺間しい考から、盛んに、そんなアンチョコなものに集つた。清國留學生教育のある種の學校、教育者、を当時「學商」或は「學店」と呼んだ、といふことが、何よりも明らかに、極端な速成教育の幣を諷したものではあるまいか。(『日華學報』第63号、1937年9月、35頁)

このように「惜別」のテキストをことこまかに讀んでみると、「惜別」の中國人留學生像の形成には、雜誌『日華學報』に連載された實藤惠秀の記事が重要な資料として使われていたことがわかる。ここで問題として取り上げたいのは、「惜別」の中では前掲した引用をふくめる、中國批判に關連のセリフは、すべて周樹人に言わせているものの、「惜別」に參考資料として引用されたと思われる雜誌『日華學報』に掲載されている實藤の「中國人日本留學史稿」は、日本人の中國人留學生に對する認識が反映されている記事が多いことを考えなければならない。それは「惜別」に描かれている中國人留學生像には、日本人の認識を中心とする偏った資料による「ずれ」が生じており、中國人留學生像の形成にあたって客觀的な觀点が不足しているからである。そこで太宰の「惜別」が＜中國に對する認識不足＞という不定的な評価と結び付けられると思われる。

4. むすびに

「惜別」には、前掲したように、實在の魯迅と中國人留學生に關する資料が引用されていることが明らかになった。そして「惜別」に描かれている實際の魯迅像や中國人留學生像には、偏った資料による「ずれ」の問題が生じていることが確認できた。從來の「魯迅像のずれ」の問題は、魯迅研究家の竹内好の論が中心になっているゆえに、「惜別」の否定的な評価をもたらした大きな原因としてあげられる。そしてその中には、いままで言及されてきた虚構の魯迅像だけではなく、太宰が實際に引用した魯迅關連の資料とも深く關わりがあることが確認できた。そして「中國に對する認識不足」という否定的な批判の中にも、中國人留學生に關する資料、『日華學報』と深く關わっているとみるものである。これから一人の作家および作品を研究する際、その時代を反映する資料の引用および影響關係をつきとめる作業は重要な分野として注目しなければならない。

【參考文獻】

・荒井建(1967年)「こつの魯迅像ー竹内女子と太宰治のばあいー」『大學理論の研究』(p.201 ~209)
・奥野健男(1973年)『惜別』新潮文庫(p.306～309)
・小田嶽夫(1941年)『魯迅伝』筑摩書房
・竹内好(1944年)『魯迅』日本評論社
・小田嶽夫(1998年)「惜別準備の頃」『太宰治全集八卷』筑摩書房(p.424 ~425)
・神谷忠孝(1974年)「惜別」『作品論太宰治』双文社(p.248 ~263)
・千葉政昭(1983年6月)「太宰治と魯迅ー『惜別』を中心として」『國文學解釋と鑑賞』(p.130～134)
・『日華學報』(1925年11月、1928年1月) 日華學會發行
・竹内好(1956年10月)「化鳥風月」『新日本文學』(p.122 ~124)
・野乃宮紀子(1999年9月)「『惜別』」『國文學解釋と鑑賞』(p.119~ 124)
・山崎正純(1999年6月)「太宰治と中國ー『惜別』を中心にー」『國文學解釋と教材の研究』(p.83～97)

KCI

要 旨

太宰治の「惜別」について、いままでの先行論文を調べてみると、否定的な評価が多くみられる。それは「惜別」が内閣情報局と日本文學報國會による大東亞五大宣言の文學作品化の企畫にえらばれた作品であることがとりあげられ、太宰が戰時下の当局の要請に積極的に応じて書いた作品であるからである。そしてそれとは別の問題として、中國の大文豪である魯迅像と中國に對する認識不足という批判も多くみられる。そこでいままで魯迅研究家である竹内好論を中心に行われてきた魯迅像とのずれの問題に疑問を投げ掛け、實際太宰治が讀んでいた魯迅伝を中心に、「惜別」に描かれている新しい魯迅像を追求した。すなわち竹内好論を中心に行われてきた魯迅像とのずれの問題は、太宰が主に讀んでいた小田嶽夫の「魯迅伝」であることを明らかにすることで、魯迅に對する觀点の差にすぎないということを証明した。また中國に對する認識不足の問題は、当時太宰が直接讀んでいた雜誌『日華學報』を中心に、その引用文を比較しながら、「惜別」に書かれている中國や中國人留學生に對する批判意識が、日本人の認識から生じたことを明らかにした。

一人の作家あるいは作品を研究する際、その時代を反映する資料の引用および影響關係をつきとめる作業は重要な分野として注目しなければならない。

キーワード：雜誌メディア、魯迅像とのずれ、『日華學報』

투　　고：2006. 2. 28
1차 심사：2006. 3. 11
2차 심사：2006. 4. 1

住　所：(402-836) 인천시 남구 주안5동 28-12 삼성에센빌라-403
電　話：032-204-1848
e-mail：hyunju88@hotmail.com